『江蘇師範講義・地理』における
牧口常三郎『人生地理学』の受容と変容
－『第一編』「地球」と『第三編』「陸界」を中心に－

The cultural adoption and adaptation of　Makiguchi's ‘Human Geography’ in ‘Jiangsu Normal School Lectures・Geography’
－With a focus on Part1‘The Earth’ and Part2‘Landmass’－

文学研究科社会学専攻博士前期課程修了

王　　成　瑋

WANG CHENGWEI

要約

本論文は、1906 年に江蘇師範生により編訳された『江蘇師範講義・地理』及びその原本となる牧口常三郎『人生地理学』を研究対象とし、幸泉「文化移転と変容の型」という理論的枠組みを用い、『江蘇師範講義・地理』の『第一編』「地球」と『第二編』「陸界」を中心に、編訳の過程で生じた牧口『人生地理学』の受容と変容を考察したものである。

第一章では、『江蘇師範講義・地理』と牧口『人生地理学』の関係性を明らかにした。第二章では、同時期の日本地理教科書に着目した上で、江蘇師範講義・地理』『第一編』「地球」に見られる牧口『人生地理学』の受容及び変容について考察した。第三章では、『江蘇師範講義・地理』「陸界」に見られる配列の変化、国家政治体制改革への関心を検討した。

本研究を通して、清末の教育改革の新たな側面を提供し、江蘇師範生の地理教科書編集を通した近代中国の地理教育に対する影響の一端を明らかにした。

Ⅰ．序論

１．時代背景と先行研究

1900 年義和団の乱により、西太后が主導する光緒新政が 1901 年から開始し、とりわけ教育改革に重点が置かれた[1]といえる。江蘇省は当時近代教育導入の先進地域の一つであり、また新式学堂の設立や日本人教習および顧問の招聘により、教育近代化が推進されたのである。

1902 年に張之洞(1837-1909)は「創建三江師範学堂摺」「籌定学堂規模次第興弁摺」等を相次いで発表し、江蘇教育改革構想を明らかにした。南京に学務処を設け、これに江蘇地区と江寧地区からな

[1] 周東怡「20 世紀初頭の中国における教育改革の展開(1902-1916)-近代学制の施行とその実態-」東京大学 博士(学術) 甲第 30838 号、2014 年。

る江蘇省全域の学務を統括させる計画となった。張之洞は南京両江学務処及び南京三江師範学堂の創設に取り掛かり、省内外から中国人有識者を招聘する一方、この創設事業に与かるすぐれた人材の派遣を日本に求めた。その後、江蘇巡撫に着任した端方(1861-1911)は 1904 年 4 月から江蘇学務処の設立に着手し、学務処には教科書用図書および参考図書の収集、翻訳を管掌する翻訳科が設けられている[2]。

一方、1901 年に西太后の改革案の要請に応じ、両江総督劉坤一(1830-1902)および湖広総督張之洞が共同で三回にわたり提案した「会奏変法自強三疏」は「海外留学生の奨励」を提唱し、それにより日本への留学派遣が重点施策となっていた。特に速成教育で師範生を中心とする派遣を通して、帰国後に彼らが小・中学堂の教師として教育の普及に役に立つことが期待されていた[3]。

速成教育が主流となっていた当時、留日学生を受け入れる日本の教育機関の代表となるのは宏文学院(1902-1909)であった。宏文学院は嘉納治五郎(1860-1938)により開設された中国人留学生のための特設教育機関であり、1902 年 1 月に開校したのである[4]。牧口常三郎は 1904 年 2 月から 1907 年 4 月まで、同学院で地理学を担当していた[5]。なお、『江蘇師範講義・地理』は 1906 年 3 月に日本で印刷され、4 月に発行されたことから、江蘇省学務処の設立を加えて考慮すると、編集者である江蘇師範生は 1904 年 4 月から 1905 年の間に宏文学院へ入学し、牧口の講義を受けていたと考えられる。他方、当時、官費留学生は本国政府の援助を受け、講義ノートを印刷・刊行し、「翻訳教科書」として本国および日本滞在の留学志望者に頒布していた[6]ため、編集者の江蘇師範生は清末の官費留学生であったことも推測できる。

以上を踏まえて、本研究では、牧口『人生地理学』日本語版と江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』を研究対象とし、比較していく中で『江蘇師範講義・地理』における牧口『人生地理学』の受容と変容を考察する。

先行研究に関しては、主に二種類に分類できる。一つ目は著書である。代表的なものとして、鄒振環(2000)『晩清西方地理学在中国』が挙げられる。同書は 1815 年から 1911 年の間における西洋地理学の訳本の伝播と影響を中心に展開している。特に日本書を通じて西洋地理学を吸収するという側面から考察し、『人生地理学』の中国語版は重要視されている。また、郭双林(2000)『西潮激蕩下的晩清地理学』は西洋地理学の伝来から、中国における変容や民主的科学的思想の伝播[7]などを詳述している。

二つ目は、学術論文である。中国における代表的な論文は艾素珍(1996)「清末人文地理学著作的翻

---

[2] 蔭山雅博「清末江蘇省の教育改革と日本人教習」、日本の教育史学 31（0)、1988 年、pp73-92。
[3] 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』、竜渓書舎、2002 年、pp28-29。
[4] 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育−清末期留日教育の一端(一)−」、日本の教育史学 23（0)，日本の教育史学 23（0)，58-79，1980 年、pp58-79。
[5] 高橋強「『人生地理学』と清末中国人留日学生−『江蘇師範講義・地理』をめぐって」、創大中国論集第 10 号、2007 年、p26。
[6] 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育−清末期留日教育の一端(二)−」、斎藤秋男ほか『教育のなかの民族:日本と中国』、明石書店、1988 年、p147。
[7] 郭双林『西潮激蕩下的晩清地理学』、北京大学出版社、2000 年。

譯和出版」であるが、ただ『人生地理学』についての記述は基本情報にとどまっている。一方、日本において、『人生地理学』に関する研究は中国より多く、中でも日本語版と中国語版との比較研究が進展しており、特に高橋「牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察」(2002)、「『人生地理学』と清末中国人留日学生-『江蘇師範講義・地理』をめぐって」(2007)などは注目に値する。特に「牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察」[8](2002)においては、『江蘇師範講義・地理』(1906)研究対象として、「目次」「序」に触れながら、それぞれの出版背景を詳しく考察した。『江蘇師範講義・地理』に対して、同書の編纂は全国教科書統一(1907 年『初小国文教科書』）前のものであるが、江蘇省の各学堂の教科書が混乱していた状況を考えると、質量を統一したという点で注目に値すると評価した。また、牧口『人生地理学』は清末の教育改革の中で新式学校の教科書として、清末の愛国主義や民主思想の伝播に影響をもたらしたとある。

２．問題提起と仮設

以上のことを踏まえ、牧口常三郎『人生地理学』に関する日中比較研究はあったが、異なる角度から更に深めて探求する余地がまだあるように思われる。特に、『江蘇師範講義・地理』に着目し、文化移転という理論的枠組みを用い、牧口『人生地理学』の受容と変容についての研究はまだ不足していると考える。そのため、本研究では、文化移転という視点から、教科書としての『江蘇師範講義・地理』の『第一編』「地球」と『第三編』「陸界」にみる牧口『人生地理学』の受容と変容について詳しく考察し、その特徴を明らかにしたい。

幸泉(2004)によると、文化移転[9]には、「強制」「説得」「借用」「合成」という四つの型があり、また移転された文化は精神環境、社会環境、自然環境によって変容するということが分かる。江蘇師範生が『人生地理学』を翻訳するという行為は自発的であるため、「借用」「合成」というパターンが同時に伴っていると考えられる。その上、当時の社会環境や思想環境の影響下で、最終的に彼らによって編訳された『江蘇師範講義・地理』の内容は必ずしも原作と一致するとは言えないのである。したがって、『江蘇師範講義・地理』を具体的に分析し検討を加えることにより、牧口『人生地理学』の受容と変容の特徴や、その時代背景との関連が窺えるのではないかと考える。

３．研究方法と意義

研究方法として主に牧口『人生地理学』及び『江蘇師範講義・地理』の原文の解釈を中心とした文献研究および、日本語原作である牧口『人生地理学』と中国語版『江蘇師範講義・地理』との比較を中心とし、同時期その他の日本地理教科も視野に入れた上で、比較研究をしていく。以上を通して、『人生地理学』を文化移転という新たな視点から、とくに「借用」「合成」の視点から考察すること

[8] 高橋強「牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察」、創価教育研究創刊号、2002 年、pp3-20。
[9] 幸泉哲紀「文化移転と変容の型」、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要６』、2004 年、pp157-164。

は、『人生地理学』の近代中国への影響の解明に繋がり、『江蘇師範講義・地理』を考察することで、江蘇師範生の地理教科書編集を通した近代中国の地理教育に対する影響の一端を伺えると考える。

Ⅱ．第一章『江蘇師範講義・地理』と牧口『人生地理学』との関係

１．『江蘇師範講義・地理』について

(1)　「奥付」と「序」

奥付は以下の通りである。

光緒三十二年三月二十五日印刷(1906)

光緒三十二年四月一日發行

全部十六冊定價大洋六元

編輯者　江蘇師範生

發行所　江蘇寧屬學務處；江蘇蘇屬學務處

印刷人　日本東京淺草黒船町[10]　榎本邦信

印刷所　日本東京淺草黒船町　東京並木活版所

以上からわかるように、『江蘇師範講義・地理』は江蘇師範生により編輯され、1906 年 3 月に日本で印刷され、翌月に江蘇寧屬學務處と江蘇蘇屬學務處により発行されたものである。同書は主に緒論と、本論である「地球」「氣界」「陸界」「水界」「人類及產業地理」という五編から構成される。目次の前に「人生地理学」というタイトルが明記され、目次の次に以下の序が書かれている。

> 日本牧口常三郎講授。地理学は三つに分類できる。第一は数理地理学、また曰く天文地理学；第二は自然地理学、また曰く地文地理学；第三は人生地理学、また曰く人文地理学。同科目は主として地人関係の理を発見し明らかにする。講師の牧口先生は専門著作を著し、根拠が的確で議論が豊富である。本書は(牧口『人生地理学』)の重要な部分を選択し編集するもので、教科書の用に備える。もし全貌を知りたいと思えば、先生の原著(人生地理学)を参考にすることができる[11]。

序を踏まえ、『江蘇師範講義・地理』は牧口常三郎『人生地理学』をもとに編訳されたものであることがわかった。また、地理学が地人関係を説明する学問であり、「数理(天文)地理学」「自然(地文)地理学」及び「人生(人文)地理学」という三類に分けられると記されている。さらに、同書は原著である牧口『人生地理学』から要約され、教科書とされるものであること、つまり同書の原著ならびに用途を明らかに記述している。

[10] 東京都台東区駒形付近、1934 年廃止。
[11] 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、p1。

２．『人生地理学』の刊行について

1894 年に起こった日清戦争で日本が勝利し、国内では国家主義的な風潮が急速に高まっていった。当時日本が獲得した遼東半島の領有権は、フランス、ドイツ・ロシア三国の干渉により返還を余儀なくされ、また朝鮮における優位な地位もロシアの進出により危うくされて、ロシアとの対立が深刻になりつつあった[12]。日露戦争の前年にあたる 1903 年に、ロシアとの開戦論が世論の頂点に達するなか、志賀重昂によって校閲された牧口の『人生地理学』が発刊された。

同書の例言において、題名の意味と同書の目的は以下の牧口の説明より伺える。

> 「人生」の語は其結局は同じからんも、一見、二様の意味を用ひらるるものの如し。「人の一生」と「人間の生活」と是れなり。ここのは其後者の意味に従ひたるものにて人類の物質的および精神的の両方面の生活を意味、従つて其中には経済的、政治的、軍事的、宗教的、学術的等、諸般の生活を包含す。人類社会の生活の此等諸方面と地理との関係を論ずることは之れ本書の聊か予期したる所[13]。

また、同年、日本歴史地理研究会が発行した雑誌「歴史地理」においては、『人生地理学』に対して「わらは、この快著を歓迎して世に推薦するものなり」[14]と評価されている。さらに、牧口『人生地理学』は、当時著名な地理学者小川琢治(1870-1941)、教育者新渡戸稲造(1862-1933)たちに感銘を与え、現場の教師や学生の間でもよく読まれ、文検地理科受験者の必読書とまで言われた[15]。

Ⅲ．第二章『第一編』にみる牧口『人生地理学』の受容と変容

本章では、『江蘇師範講義・地理』『第一編』「地球」に見られる牧口『人生地理学』の受容及び変容について考察し、そしてそれに対応する牧口『人生地理学』における章節の目次表を提示した上で分析を行う。特に原作にはなかった「暈滃法」を詳しく分析する。さらに視点を広げ、同時期の日本地理教科書に着目し、それらが『人生地理学』の変容にいかなる影響を及ぼしたのかを明らかにしていく。

対照目次表は以下の通りである。

『江蘇師範講義・地理』『第一編』目次表[16]

第一編 地球	第一章 地球之形状	
	第二章 地球形状與人生之關係	一、圓筒平寫法
		二、圓錐直寫法

[12] 宮田幸一『牧口常三郎の世界ヴィジョン』、第三文明社、1995 年、p14。
[13] 牧口常三郎『牧口常三郎全集・第二巻「人生地理学・上」』、第三文明社、1983 年、p4。
[14] 日本歴史地理研究会『歴史地理』第五巻第二十号、1903 年、p84。
[15] 西原賢太郎発行『創価教育の源流:牧口常三郎』、潮出版社、p30。
[16] 筆者により作成。

<table>
<tr><td rowspan="9"></td><td rowspan="3"></td><td colspan="2">三、直寫法</td></tr>
<tr><td colspan="2">四、平寫法</td></tr>
<tr><td colspan="2">五、三角測量法</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第三章 地球之運動</td><td colspan="2">一、地球之自動</td></tr>
<tr><td colspan="2">二、地球之公轉</td></tr>
<tr><td rowspan="6">第四章 地球之表面</td><td rowspan="3">第一節 陸界之區別</td><td>水陸之關係</td></tr>
<tr><td>形状</td></tr>
<tr><td>地勢之高低</td></tr>
<tr><td rowspan="3">第二節 水界之區別</td><td>水陸之關係</td></tr>
<tr><td>全面之動靜</td></tr>
<tr><td>從陸之距離</td></tr>
</table>

牧口常三郎『人生地理学』第五章目次表[17]

第五章　地球	第一節 地球の形状と人生
	第二節 地球の大サと人生
	第三節 地球の運動と人生
	第四節 地球の部分と人生
	第五節 水界及び陸界

『江蘇師範講義・地理』『第一編』「地球」は「地球之形状」「地球形状與人生之關係」「地球之運動」「地球之表面」という四章によって構成される。目次表が示しているように、同編は「地球」を中心に展開されており、各章の内容が細かく整理されている。具体的な内容としては、牧口『人生地理学』に基づいた概論化した説明文となり、原著と対照すると、文量の差が一目瞭然である。

例えば、『江蘇師範講義・地理』『第一編』第四章第一節は、「陸界之區別」をテーマとし、「水陸之關係」「形状」「地勢之高低」という影響要素によって陸界を分類した。だが、それらに関する説明文はそれぞれ一、二行しかないが、簡潔にまとめられていることがわかる。原作の内容を見てみると、第五章第五節「水界及び陸界」では、陸界を説明する際に二人の地理学者の言葉が引用された。すなわち、「ワグネル氏は『海洋の影響（気候其他）が、其地の内部に及ぼすものを島と云ふ。故に、濠洲の如きは島にあらず』と曰ひ、またラッツェル氏は『数多の人類の文明開発に要する物件は悉く已に足りて外に待つことなきの陸地を以て大陸と称す』と云へり」[18]として、その次に陸界を前述の三つの影響要素をもとに分類した。つまり、地理学者の言葉により文章に新たな論拠が加わり、さら

[17] 筆者により作成
[18] 牧口常三郎『牧口常三郎全集・第二巻「人生地理学・上」』、第三文明社、1983 年、p69。

に論理的になっているのである。とはいえ、江蘇師範生が『人生地理学』を教科書として訳し編集することから、地理知識の習得を目的とする学生が対象者であるため、まずは理解しやすく基礎的な内容から教えなければならないのである。また、地理学者の言葉は重要であるものの、学生たちにとって、おそらく耳にしたことのない人物であろうし、初期段階では必ずしも必要とならないのである。それがゆえ、江蘇師範生は以上のことを考慮し、文章を簡単明瞭にするように心がけていたのではないかと考える。

１．「暈滃法」の導入

第二章「地球形状與人生之關係」における地図の製図に使用される五つの方法及び地形の製図に関する内容は、牧口『人生地理学』には見当たらない。当時の中国の地理学研究の現状から見ると、西洋の測量製図理論の東漸につれて、清末の学者は伝統的な測量製図方法と西洋の測量製図理論を結合させ、新しい測量製図理論と方法を作り上げようと試みていた[19]。つまり、その理論と方法は当時国内で使われ、認められていたため、編集者はその価値を考えた上で同書に導入したと考える。

ここで、『江蘇師範講義・地理』で言及された「暈滃法」[20](地図で地形の起伏を表す方法)を取り上げて考察する。張佳静によると、暈滃法は 18 世紀にヨーロッパで生まれ、西学東漸に伴い中国に伝来した。中国国内では、最も早く暈滃法を使用された地図は西洋人によって作成されたという。また、洋務運動を背景に、1868 年から江南制造局翻訳館で通訳を担当しているイギリス人ジョン・フライアーにより訳され、出版した『行军测绘』(1873 年)、『測地絵图』（1876 年）において、中国で最も早く暈滃法の理論と方法が紹介されている。1886 年、清政府によって北京で「会典館」が設立され、『大清会典図』の編纂を司ることとなった。当時著名な地理学者鄒代鈞は会典館への上書の中に、仏国とゲルマンの暈滃法を紹介した。その後、各省が呈した地図の中で、《湖北舆图》と《安徽舆图》はその暈滃法を使用していることが判明した[21]。換言すれば、暈滃法は公式的に採用されたのである。

ところが、当時「暈滃法」という正式的な名称が存在しなく、ただその理論と方法が定着していった。張佳静は「地图学中的“晕滃法”一词的演变与发展」[22]の中で、中国における「暈滃法」という言葉の変遷について考察し、民国期に定着したとしている。後に「地图晕滃法在中国的传播与流变」において、「暈滃法」という名称が登場した史料を提示しているが、早くても 1928 年出版の劉玉峰著『地理通论』にあったことが記されている。しかしながら、1906 年出版の『江蘇師範講義・地理』には、既に「暈滃法」という名称が使用されていることが判明したため、張佳静の研究の再検討とともに、「暈滃法」という言葉の変遷を知る上で、新しい視点を提供したと考える。

一方、筆者の現段階の考察によると、日本で「暈滃法」という言葉は早くも 1884 年に測量局地圖

19 郭双林『西潮激荡下的晚清地理学』、前掲、p123。高橋強「牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察」、前掲、p9 から転注。
20 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、p8。
21 張佳静「地图晕滃法在中国的传播与流变」、『中国科技史杂志』第 34 巻第 4 期、2013 年、pp485-501。
22 張佳静「地图学中的“晕滃法”一词的演变与发展」『中国科技术语』、2013 年、15(02)、pp61-63。

課により出版された『刻線暈滃法』[23]の中で使用されている。その後、1892 年白幡郁之助編『簡易測図法』第一編第九章[24]、1897 年出版の『歩兵野外勤務・路上測図の部』[25]及び 1906 年出版の柘植重美・高野松次郎著『地理科用描図法:地図の描き方並に読み方』第二章[26]において、「暈滃法」が紹介されていることがわかった。すなわち、当時の日本では、「暈滃法」の理論と方法、またその名称は既に定着していたと思われる。

以上のことを踏まえると、『江蘇師範講義・地理』に登場した「暈滃法」は江蘇師範生が日本留学中に日本で接触した言葉として、当時の中国国内ではその名称が存在しなかったが、その理論及び方法がすでに採用されていたことが分かる。そのため、江蘇師範生は『江蘇師範講義・地理』を編集する際に、日本での名称を国内の理論と方法を結合させ、「暈滃法」を導入したと考えられる。

２．製図法から見る日本地理教科書との関連

さて、日清戦争後は東西の学を学ぶために新書を読むことが、中国知識人の必要なことになったため、読書案内というべきものが次々に現れたという[27]。その中で、顧燮光著『訳書経眼録』に 1901-1904 年までに出版された書物が収録されており、楊寿椿がそれらを一覧表[28]にした。同一覧表によると、合計 533 冊の中で原本が日本書であるものは 321 冊があり、60%を占めている。さらにそのうち合計 46 冊の地理書の中で原本が日本書であるものは 34 冊があり、74%を占めていることが分かる。実藤(1981)は、「これにあらわれたところでは、日本書は 60%強である。しかし西洋諸国のものも、この頃は主として留日学生によって日本の訳文から漢訳されたことを思うとき、日本文からの翻訳は極めて多いものになるであろう」[29]とあり、「こうした状態は、だいたい清朝のすえ(1911)まで続いた」[30]と説明している。

以上のような背景下で、当時の中国の地理書は、日本書による漢訳版が主であり、そこで牧口『人生地理学』が江蘇師範生によって編訳されたこともその一環になると考える。その結果、『江蘇師範講義・地理』は教科書の編集を目的としていたので、当時の日本の地理教科書から大きな影響を受けたのであろう。ここで、前述した第二章「地球形状與人生之關係」における地図の製図に使用された五つの方法については、牧口『人生地理学』にない内容であるが、それは江蘇師範生が日本の地理教科書の仕組みを模倣し、有益と思われる内容として加えたのではないかと考える。

『江蘇師範講義・地理』が出版される前の日本の地理教科書を考察した結果、菊池熊太郎著『中等地理教科書』(1895)第一篇第四章「経緯度」では、地図の製図法が二つ挙げてある。

---

[23] 測量局地圖課『刻線暈滃法』、1884 年。
[24] 白幡郁之助編『簡易測図法』、千城社、1892 年。
[25] 『歩兵野外勤務・路上測図の部』、有則軒、1897 年。
[26] 拓植重美・高野松次郎著『地理科用描図法:地図の描き方並に読み方』、尚友館、1906 年。
[27] 実藤恵秀『中国人日本留学史』、くろしお出版、1981 年、p282。
[28] 同上、p283。
[29] 同上。
[30] 同上、p284。

地圖ヲ製スルノ法種種アリト雖、全地球ヲ寫スニハ、通常二法ヲ用フ。一ヲ寫球法ト云ヒ、一ヲまるけーとる製図法ト云フ。寫球法ハ東西両半球ニ分チ、二個ノ半球圖ヲ以テ全地球ヲ示ス……まるけーとるノ製圖法ニ依レハ、地球を圓柱形ニ改メタルモノト假定シ、縦ニ畫ケル平行線ヲ以テ経線ヲ示シ、是ト直角ニ交ル横線ヲ以テ緯線ヲ現ス[31]。

以上の内容を『江蘇師範講義・地理』における製図法と対照してみれば、上述の「寫球法」が「直寫法」に相当し、「まるけーとる製図法」が「圓筒平寫法」に相当することが分かる。

そのほか、筆者の考察によると、『江蘇師範講義・地理』「地球形状與人生之關係」は山上萬次郎(1868-1946)著『最近中学地理教科書・地文之部』(1902)第一篇第四章「地表の測定」の内容と比較してみると、内容から構成まで著しい類似が見られる。

内容から見ると、例えば、『最近中学地理教科書』「地表の測定」において三つの経緯線の引き方が挙げられている(図 1、2、3 参照)。

図 1 平射圖法

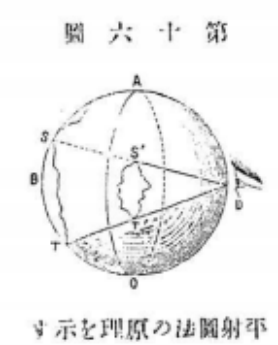


図 2 航海圖法

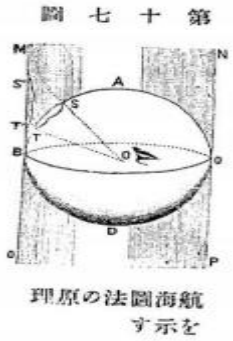
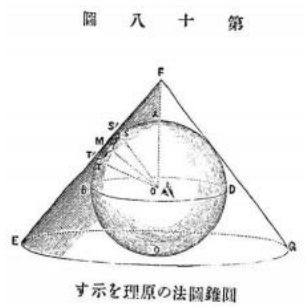


図 3 圓錐圖法



出所: 山上萬次郎『最近中学地理教科書』pp17-18

図 4 直寫法

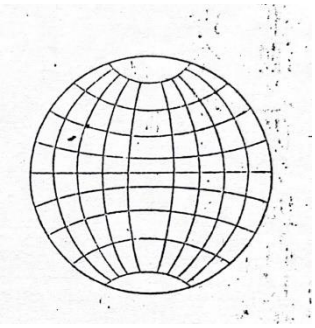


図 5 圓筒平寫法

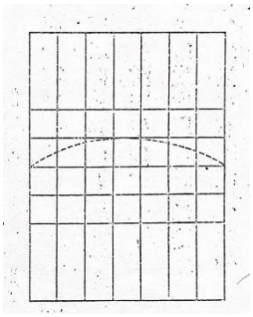
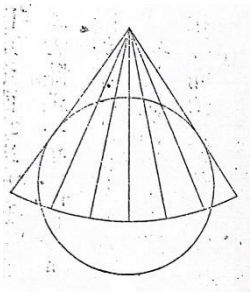


図 6 圓錐直寫法



出所:『江蘇師範講義・地理』pp6-7

[31] 菊池熊太郎『中等地理教科書』、金港堂、1895 年、pp33-34。

一つ目は「平射圖法」という。「此の圖法は目を地球自身の面上に置き、裏側より地面を見しとき、地球の中心を通じて、假りに置けるガラス板に映ずる有様を寫せしものなり」[32]と記述している。それに対して、『江蘇師範講義・地理』では、「直寫法」(図 4 参照)と呼ばれ、「紙をガラス球に覆い、投影する」[33]という説明も「平射圖法」と同じようになっているのである。

二つ目は「航海圖法(メルカトール圖法)」という。これは前述の「まるけーとる製図法」とは同じ内容となっているが、訳し方によって呼び方が異なっていると考えられる。「地球を巻くに、一の圓筒形の紙を以てし、目を地球の中心に置き、圓筒上に映ずる地表の有様を寫し、圓筒紙を一の子午線に沿ひて切り、これを開展せしものなり。通常世界全圖の経緯線は此の引き方による」[34]と説明している。一方、『江蘇師範講義・地理』において「「ガラス球を紙で巻き、目を球の中に置いて観察する」[35]と書いてある。すなわち、「圓筒平寫法」(図 5 参照)は「航海圖法」に相当することがわかる。

三つ目は「圓錐圖法」という。引き方として「……地球を巻くに、圓錐形の紙を以てするにあり。此の法によるときは、一地方を最も真に近き割合を以て示し得べし」[36]と記されている。これに相当する「圓錐直寫法」(図 6 参照)は「紙を尖角形に折り、地球儀上に覆う。畫法は圓筒平寫及直寫法と同じになり、それで各地の地図を得られる」[37]となる。説明方法は一見して違うように見えるが、引き方や得られる地図についての説明は同じ意味であるといえよう。

また、構成から見ると、両書とも経緯線の引き方の次に「等高線」の書き方やそれによる山の緩急についての読み方が記述されており、その次に「三角測量法」が紹介されている。ただし、全体的に見れば、『江蘇師範講義・地理』の文量が比較的少なくなっている。

以上に基づき、『江蘇師範講義・地理』における測量製図法は留学生が日本で接触した地理教科書を参考にして取り入れたのである。特に、同部分の内容と構成は『最近中学地理教科書・地文之部』(1902)第一篇第四章「地表の測定」を手本としているのではないかと考える。

3．まとめ

以上のように、『江蘇師範講義・地理』『第一編』「地球」は全体的に見れば、牧口『人生地理学』第五章「地球」から編訳されたものとなる。この編訳の過程を文化移転の視点から考察すると、やはり「借用」「合成」に当たるのであろう。地理教科書の編集の中で、江蘇師範生は当時の中国の地理教育の現状を考慮しながら、翻訳の際に自国では普及していない測量製図法を借用し、また「量溜法」という名称を国内に既存の方法論と結合させ、専門化したという点は顕著である。一方、牧口『人生地理学』を翻訳することが中心となるが、それと同時に、ほかの日本の地理教科書を視野に入れて模

[32] 山上萬次郎『最近中学地理教科書』、大日本図書、1902 年、p17。
[33] 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、p7。
[34] 山上萬次郎『最近中学地理教科書』、前掲、pp17-18。
[35] 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、p6。
[36] 山上萬次郎『最近中学地理教科書』、前掲、p18。
[37] 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、p6。

倣しながら、価値のある内容を積極的に導入しようとする姿勢も評価されるべきであろう。

Ⅳ．第三章『第三編』「陸界」にみる牧口『人生地理学』の受容と変容

本章では、『江蘇師範講義・地理』の『第三編』「陸界」に注目し、牧口『人生地理学』におけるそれにあたる部分について考察する。

対照目次表は以下の通りである。

『江蘇師範講義・地理』『第三編』目次表[38]

第三編 陸界	第一章 平原	第一節 平原與人生	
		第二節 平原之種類	（甲）高原
			（乙）低原
	第二章 山嶽	第一節 概念之要素	一、高度與人生
			二、高度與植物
			三、高度與水原
			四、傾度與人生
			五、炮車牽引之界線
			六、人間攀躋之限度
		第二節 山脈及鑛產	一、山之集合
			二、山脈之方向
			三、山脈之成因
			四、鑛產之種類
		第三節 歷史上山嶽之影響	一、民氣之雄武
			二、封建之源起
			三、偉人之修養地
			四、古代風俗之陳設所
	第三章 島	第一節 島國之特質	一、獨立之思想
			二、進取之氣象
			三、愛國心之發達
			四、氣候之完全
		第二節 島之種類	陸島
			洋島

[38] 筆者により作成。

第三編 陸界		第三節 島之位置	近海島、遠洋島
			河島、湖島
		第四節 世界重要之島	一、關於商務上者
			二、關於軍事上者
	第四章 半島	第一節 半島之成因及其配置	
		第二節 半島與文化之關係	一、文化之起源
			二、文化之傳達
	第五章 地峽		

牧口常三郎『人生地理学』第六～十章目次表[39]

第一篇 人類の生活処としての地	第六章 島嶼	第一節 島国の特質
		第二節 島の種類と人生
		第三節 貿易上及国防上に於ける島
		第四節 島と英雄及罪人
		第五節 開明時代に於ける島
	第七章 半島及岬角	第一節 半島の特質及成因
		第二節 半島と文明
		第三節 半島の配置並に運命
		第四節 半島の利用
		第五節 岬角と人生
	第八章 地峡	第一節 地峡の種類並びに地峡と人生
		第二節 地峡に対する近世の努力
	第九章 山嶽と谿谷	第一節 山の高度と人生
		第二節 山の各部と人生
		第三節 山の集合と人生
		第四節 山脈の方向と人生
		第五節 山脈の成因と人生
		第六節 火山と人生
		第七節 谿谷と人生
		第八節 約論

[39] 筆者により作成。

		第九節 開明人に対する山
	第十章 平原	第一節 平原と人生
		第二節 平原の区別
		第三節 高原と人生
		第四節 河谷低原と人生
		第五節 海浜低原
		第六節 各種平原の分布

『江蘇師範講義・地理』『第三編』「陸界」は「平原」「山嶽」「島」「半島」「地峡」という五章から構成される。なお第一章から第五章まで、それぞれ牧口『人生地理学』第十章「平原」、第九章「山嶽と谿谷」、第六章「島嶼」、第七章「半島及岬角」、第八章「地峡」に相当する。全体的に見れば、『第三編』「陸界」は主として牧口『人生地理学』の再配列と内容の翻訳が中心であるが、編集者によるオリジナルな発想が散見する。

１．内容の再配列

目次表から分かるように、主な内容に大きな変更はないが、各地形の配列の順番が改変された。これは日中両国の地形の特徴に基づいた結果であろう。日本を考えると、「島国」が最も顕著な特徴である。国土地理院のデータによると、日本列島の地形は起伏に富み、火山地・丘陵を含む山地の面積は国土の約 75%を占め、平野、盆地の多くは小規模で山地の間に点在する[40]。このような特徴をもとに、牧口『人生地理学』における地形の優先順位は、「島嶼-山嶽-平原」となっているのである。一方、中国は大陸国家であり、地形から言えば、高原が 33%、山嶽が 26.04%、平原が 18.75%を占めしている[41]。なお『江蘇師範講義・地理』においては、「高原」が「平原」に含まれるとするため、平原の割合が山嶽を超えている。故に、地形の順番は「平原-山嶽-島嶼」となるわけである。当然、当時ではそれほど精確なデータがなかったのであろうが、地形の特徴はこの百年間で大きな変化はないと思える。要するに、江蘇師範生は『人生地理学』を編訳するにあたって、内容の配列に関して、中国ならではの特徴を念頭においてさらにそれを『江蘇師範講義・地理』に反映させたと考える。

また、本文では、第三章第一節「島國之特質」として、「獨立之思想」「進取之氣象」「愛國心之發達」「氣候之完全」[42]という四つの特質を順番に述べている。それに対して、原作においては、「島嶼と気候」「島嶼の天恵」「島と心情」という内容と流れである。つまり、江蘇師範生は「気候」を最初から最後にしたのである。さらに、原作の「島と心情」において「島民は鞏固なる愛国心将た愛郷心に富み一朝外患の迫るに当つては、一致団結其身を君国に捧ぐるの慨あり」[43]という「愛国心」

[40] 国土地理院、「地形分類」、2011 年、https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_2j_02.pdf（閲覧日：2022 年 10 月 20 日）。
[41] 中国政府網、http://www.gov.cn/test/2005-06/24/content_17362_2.htm（閲覧日：2022 年 10 月 20 日）。
[42] 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、pp54-55。
[43] 牧口常三郎『牧口常三郎全集・第二巻「人生地理学・上」』、前掲、p75。

に関する説明はあるが、江蘇師範生のいう「獨立之思想」「進取之氣象」という特質のキーワードがなかった。換言すれば、それらは江蘇師範生によって新たに創造されたものなのである。

２．江蘇師範生の日本に対する態度

同編では江蘇師範生の中国への懸念が明白に示されたにも関わらず、もともと強敵であった日本を模範として、一定の肯定的な評価を与えている。

例えば、前述した第三章第一節「島國之特質」において、四つの特質はいずれも日本を中心に展開されている。「獨立之思想」に関して、以下のように述べた。

> 島は大陸と隔離され、数世紀以前、世界各国との交流往来が極めて少なかった。ここで日本を論ずると、かつてはただ中韓両国だけと相互往来を保っていた。明治維新以前においては、欧米の商船が次々とやって来ると、国中の志士たちは鎖国主義を唱え、それらを拒絶しようとした。このような大規模な排外的運動は、単に当時の独立の思想の下で育まれたのである。それが今日まで受け継がれ、日本の固有の特質となる[44]。

すなわち、江蘇師範生から見る明治維新以前の日本の鎖国主義は、その時代において島国の独立の思想から生み出されたものである。しかしながら、牧口『人生地理学』では、前述の如く、「独立の思想」というキーワードがなかったが、「島は即ち遮断物を以て大陸と隔離するが故に、一方に大陸擾乱以外に卓立するを得るの益ありと共に、又大陸の文明に後るは自然の勢なり」[45]という記述はあった。つまり、牧口は島が大陸の擾乱から離れ卓立することを利点とするが、その次に短所として島が大陸の文明開化に後れるという見解をも示した。だが、これらは決して島における「独立の思想」を説いているわけではないと考える。一方で、以上の牧口の見解は、島民の短所を論ずる際に述べたのであるものの、江蘇師範生はその一文を切り取った上で、「鎖国」が内包する「孤立」を「独立」という積極的な意味合いに変えたものと考える。。

原作において、牧口は島民の短所、所謂「島国根性」を批判し、島国人の狭隘なる度量や自負心、孤動的性質[46]などを明確に書き表した。それに対し、『江蘇師範講義・地理』「島國之特質」を考察すると、それらが全部取り除かれた。これはまさに江蘇師範生たちが島国である日本の消極的な側面を避けようとし、日本を肯定的に評価した結果なのではないかと考える。ただし、このような仕方はある種で彼らの日本への注意喚起ではあるが、良さを強調する一方、短所をほとんど論じないということは、その妥当性について、再度検討する必要があるように思われる。

---

44 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、p54。
45 牧口常三郎『牧口常三郎全集・第二巻「人生地理学・上」』、前掲、p76。
46 同上。

３．国家政治体制をめぐる議論

同編では、江蘇師範生が中国を近代国家へと変えようとする意図も反映している。第一章「平原」第一節「平原與人生」において、平原が人生に与える消極的影響として、「平原多專制國是也」[47](平原には専制国が多い)という見解が示された。牧口『人生地理学』において、「……平原は圧制家の拠る所にして、専制国の依つて起る処となる也。支那の如き露国の如き実に此適例なりとす」[48]と述べ、平原が専制国を生み出しやすい傾向やそれに当たる適例である中国およびロシアを挙げた。それに対し、江蘇師範生は中国という例を省略し、「専制国」から想起した西洋各国を具体化し、それらの国家政治体制について議論を加えた。

> 今日の六洲において、君権が最も名声高く世界で著名となったのはロシアである。ロシア本邦では、高山峻嶺(高い山と険しい峰)による阻隔がなく、それゆえ威令を行えば、その影響が素早く表れる。なおアメリカが専制国にならなかったのは、住民がイギリスからの移民してきた新民族であるからだ。仮にアメリカの開化が数千年前から開始したとすれば、その専制政体は必ずロシアに劣らないくらいだろう。またドイツとフランスをみると、両国とも平原国として、今日において前者が立憲制であり、後者が共和制である。しかし、先代の歴史を考察すると、両国の専制はスイス等よりもいっそう甚だしかったのである[49]。

以上からわかるように、江蘇師範生はロシアが専制国となり、またアメリカが専制国とならなかった原因について分析した。ここで、最も興味深いのはその次に例外と思われるドイツおよびフランスに関する議論であろう。両国とも平原国かつ昔に専制国だったにも関わらず、今日ではもはや立憲制か共和制国家となっている。これ以上は明白に書かれていないが、中国も遥かな昔から専制国家でありながらも、ドイツとフランスに見習い、立憲制あるいは共和制政体になることも可能であろうという、江蘇師範生の意思が読み取れると考える。即ち、彼らは世界時勢に応じ、中国を専制国から近代国家へと変えようとする志があり、それなりの自信も持っているのであろう。

一方、当時の中国人の中で、国家政体については立憲制と共和制のどちらにするかといったような議論がすでに起こっている。

まずは立憲制に関して、1898 年戊戌の変法で康有為、梁啓超ら変法派と光緒帝は日本を手本にした立憲制へ向けての全面改革を試み、周知のように変法は破綻したが、立憲制に対する関心が次第に高まったのである。1901 年以降、上からの全面的な近代化運動として、教育・立憲・軍事改革を三本柱とした「新政」が始まった。特に、思想的衝撃としての日露戦争によって、「立憲は専制に勝つ」という強烈なイメージが起こった。清末のエリートは日露戦争で日本の勝利に大いに刺激され、立憲と

---

47 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、p37。
48 牧口常三郎『牧口常三郎全集・第二巻「人生地理学・上」』、前掲、p144。
49 『江蘇師範講義・地理・第七編』、1906 年、pp37-38。

富国強兵の使命感を強めたのである[50]。その後、1905 年 9 月から清朝は五大臣をヨーロッパ、日本へ派遣して憲政を視察させ、翌年の憲法制定の準備をスタートさせた[51]。このように、当時の中国社会ではまさに政府やエリートたちが進んで立憲制をめぐる動きを見せたので、江蘇師範生もその影響を受けたのではないかと考える。

他方、日本で留学する学生の中で急進派が現れ、日本へ亡命した孫文(1866-1925)は彼らと連携をとり、革命派が成長してきた。そこで、1905 年 7 月に、孫文は横浜で華興会のリーダーである黄興(1874-1916)、宋教仁(1882-1913)、陳天華(1875-1905)と会って革命勢力の連合を協議した。つづく 8 月 13 日に、黄興らは東京の留学生に呼びかけて孫文の歓迎大会を開き、千人を超える留学生が「最上の改革とは共和を目指す革命だ」と説く孫文の演説に耳を傾けたという。同月 20 日に中国同盟会の成立大会が開かれ、総理に推された孫文を中心に革命が目指されることになったのである[52]。また、平野(2018)によると、孫文はこれまでのような専制政治が蔓延る状況の中で、民衆の能力が制約されて状況のまま、突然立憲政治や富国強兵を実現することはできないという立場であった[53]という。孫文は立憲に反対し、共和を全面的に推進しているのである。

以上を踏まえて、『江蘇師範講義・地理』が編集された当時、中国の専制政体の幕を引き、立憲制と共和制をめぐる議論があったことが分かる。

４．まとめ

以上のように、『江蘇師範講義・地理』『第三編』「陸界」は、五章から構成される。第一章から第五章まで、それぞれ牧口『人生地理学』第十章「平原」、第九章「山嶽と谿谷」、第六章「島嶼」、第七章「半島及岬角」、第八章「地峡」から編訳されたものである。また、原作と比較して、『江蘇師範講義・地理』「陸界」に見られる配列の変化、江蘇師範生の日本に対する評価、国家政治体制改革への関心について、当時の社会環境及び精神環境を踏まえながら検討した。

文化移転のパターンに関連付けしてみると、これまで通り「借用」「合成」になると考える。『第二編』「氣界」と同じように、原作の内容を取り入れ翻訳、再編集したが、『第三編』「陸界」には、日露戦争による強い影響を受けた結果、江蘇師範生の様々な発想が込められたのである。愛国心は言うまでもなく、再配列を通した国家の独立への理想、そして戦勝国である日本に対する称賛の上での日本の成功例の受容の推奨、さらに中国の政治体制への反省及び新しい可能性への思考も、同編によって確実に伝わったと考える。

なお、これらは相互に関連し合い、つまり、日露戦争で大きな衝撃を受けた江蘇師範生は、中国の存亡に危機感を覚え、そこで戦勝した日本をモデルにし、時勢に応じ中国を近代国家にしようとして、

---

50 平野聡『大清帝国と中華の混迷』、前掲、p338;pp340-341。
51 菊池秀明『ラストエンペラーと近代中国−清末・中華民国−』、講談社学術文庫、2021 年、p156。
52 同上、pp148-149。
53 平野聡『大清帝国と中華の混迷』、前掲、p353。

「政治」における変革意識が強まったのである。そのような思いを教科書の中に反映させ、つまり教科書による救国を図ったのではないかと考える。

V．結論

本論文は、江蘇師範生により編集され、1906 年に出版された『江蘇師範講義・地理』の第一編「地球」と第三編「陸界」における牧口『人生地理学』の受容と変容について、幸泉哲紀「文化移転と変容の型」という理論的枠組みに基づき、文化移転のパターン及び変容を起こした要素に注目し分析を試みた。

まず、受容にともない、「借用」という文化移転のパターンが発生したと考える。対照目次表及び『江蘇師範講義・地理』の序に明記されているように、同書は江蘇師範生が牧口『人生地理学』の重要な部分を選び出し、編訳した教科書である。そのため、理論的内容は基本的には地理教科書として留めているので、原作に沿っているところが多い。例えば、『第三編』「陸界」第三章「島」における「島之種類」「島之位置」という基本的な地理知識は、牧口『人生地理学』第六章「島嶼」第二節「島の種類と人生」から翻訳された内容となっていることがわかる。

一方、牧口『人生地理学』を受容していく中で、著しい変容も起こり、そこにおいては「合成」という文化移転のパターンが伴ったと考える。『江蘇師範講義・地理』が編集、出版された当時の中国における社会環境及び精神環境を考察すれば、江蘇師範生が牧口『人生地理学』を変容させた原因をも掴むことができると考える。以下、それらの変容の特徴をまとめていく。

第一は、国内に存在している地理研究の理論と結合させたことである。これに関して「暈滃法」の導入が代表的な具体例といえる。原作には「暈滃法」が論及されていないのに対して、『江蘇師範講義・地理』ではその名称、書き方及び図式が明記されている。「暈滃法」は西学東漸に伴い中国に伝来し、1886 年に公式的に採用されたが、「暈滃法」という呼び方はなかった。他方、当時の日本ではその理論と方法は既に定着していたことから、『江蘇師範講義・地理』に登場した「暈滃法」は江蘇師範生が日本留学中に日本で接触した言葉だと思われる。したがって、彼らは「暈滃法」という日本語名称を国内の研究理論と結合させた上で教科書に導入し、中国の地理研究にも貢献したのである。

第二は、その他の日本地理教科書を参考にし、それらを模倣したことである。『第一編』「地球」と『第二編』「氣界」に見られるように、『江蘇師範講義・地理』では、新たに経緯線の引き方と図式、および旋風図を加えたことがわかる。経緯線の引き方に関しては、山上萬次郎『最近中学地理教科書』が主な参考書であったと考えられる。このように、江蘇師範生は牧口『人生地理学』にとどまらず、同時期その他の日本地理教科書にも注目し、理論と方法を導入しながら、内容の充実した教科書を編集するための工夫をしていったのである。

第三は、需要に応じて原作の内容を再配列したことである。『第三編』「陸界」では、配列として「平原」「山嶽」「島」「半島」「地峡」となっているが、原作においては「島嶼」「半島及岬角」

「山嶽と谿谷」「平原」という配列である。これは、中日両国の地形特徴の違いが考慮された結果であると考える。江蘇師範生は中国の地形分布を熟知した上で、中国という立場にたち地形の内容の再配列を行ったのである。

第四は、需要に応じて原作にはない内容を付け加えたことである。『第三編』「陸界」では、江蘇師範生は原作にはなかった国家政治体制の近代化をめぐって議論したところからも伺える。清末の中国は専制国家であったが、戊戌の変法で日本を手本にした改革、光緒新政の実施、さらに日露戦争において立憲制である日本が専制国家のロシアに勝ったことによる精神的衝撃もあって、清政府およびエリート層は立憲制について検討していた。一方、孫文をはじめとする革命派は規模が大きくなりつつあり、革命を唱えながら共和制を推進していたのである。このような背景の下で、江蘇師範生は専制よりも、立憲制と共和制を近代的国家政治体制とみなし、どちらに賛成するかについては明白に表現していないが、変革を求めようとする意図は確かに伺えるである。したがって、ここで江蘇師範生は自らの思いを伝えるためだけではなく、受講する学生にも国家政治体制の将来を考えてももらうためにも、以上の議論を教科書に追加したと考える。

以上に基づき、文化移転の視点から『江蘇師範講義・地理』の『第一編』「地球」と『第三編』「陸界」にみる牧口『人生地理学』の受容と変容を分析し考察した。これ以外に、1903 年「浙江潮」に掲載された「植物與人生之關係」および「地人學・海国」は同じく牧口『人生地理学』から翻訳された文章であるこれらの牧口『人生地理学』の受容と変容の視点からの考察は今後の課題としたい。